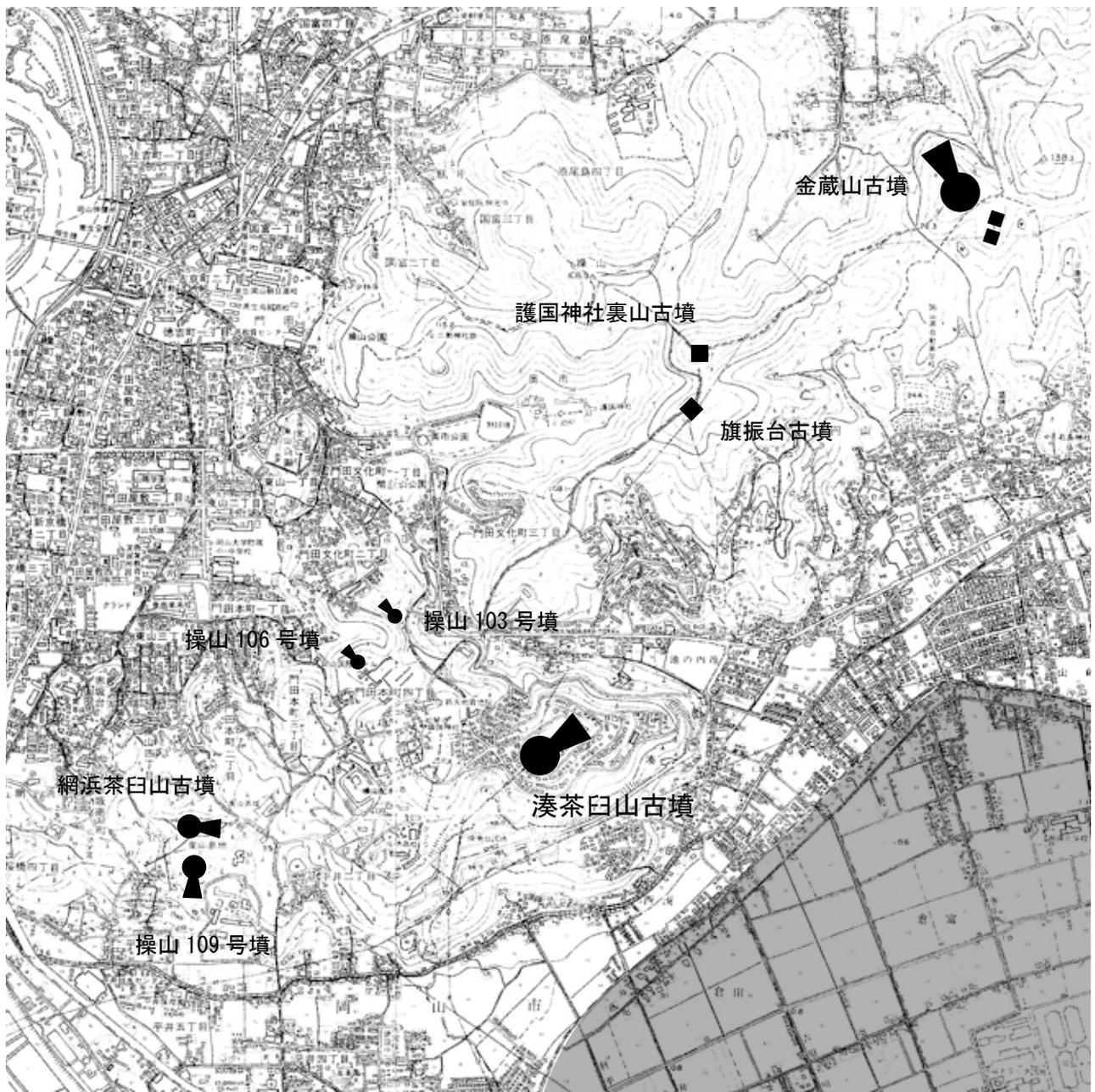


湊茶臼山古墳

—第 3 次調査現地説明会資料—

湊茶臼山古墳と周辺

湊茶臼山古墳は操山丘陵南部の山頂に立地する大型の前方後円墳です。これまでの調査で墳長約 120m 以上、後円部三段、前方部二段築成で、出土した埴輪の特徴から五世紀初頭頃に造られたことがわかりました。周辺には古墳時代初頭の網浜茶臼山古墳（墳長 92m）、操山 109 号墳（墳長 45m）、古墳時代前期末頃の金蔵山古墳（墳長 165m）をはじめ、操山丘陵全体で 200 基を超える古墳が存在しています。



第 1 図 湊茶臼山古墳と周辺の主な前期古墳 (1/20,000)

第3次調査の概要

第3次調査は後円部の形態や周辺の造成の状況、埴輪の配置状況、埋葬施設の存在状況などを追求するため、8カ所の発掘区を設定しました。

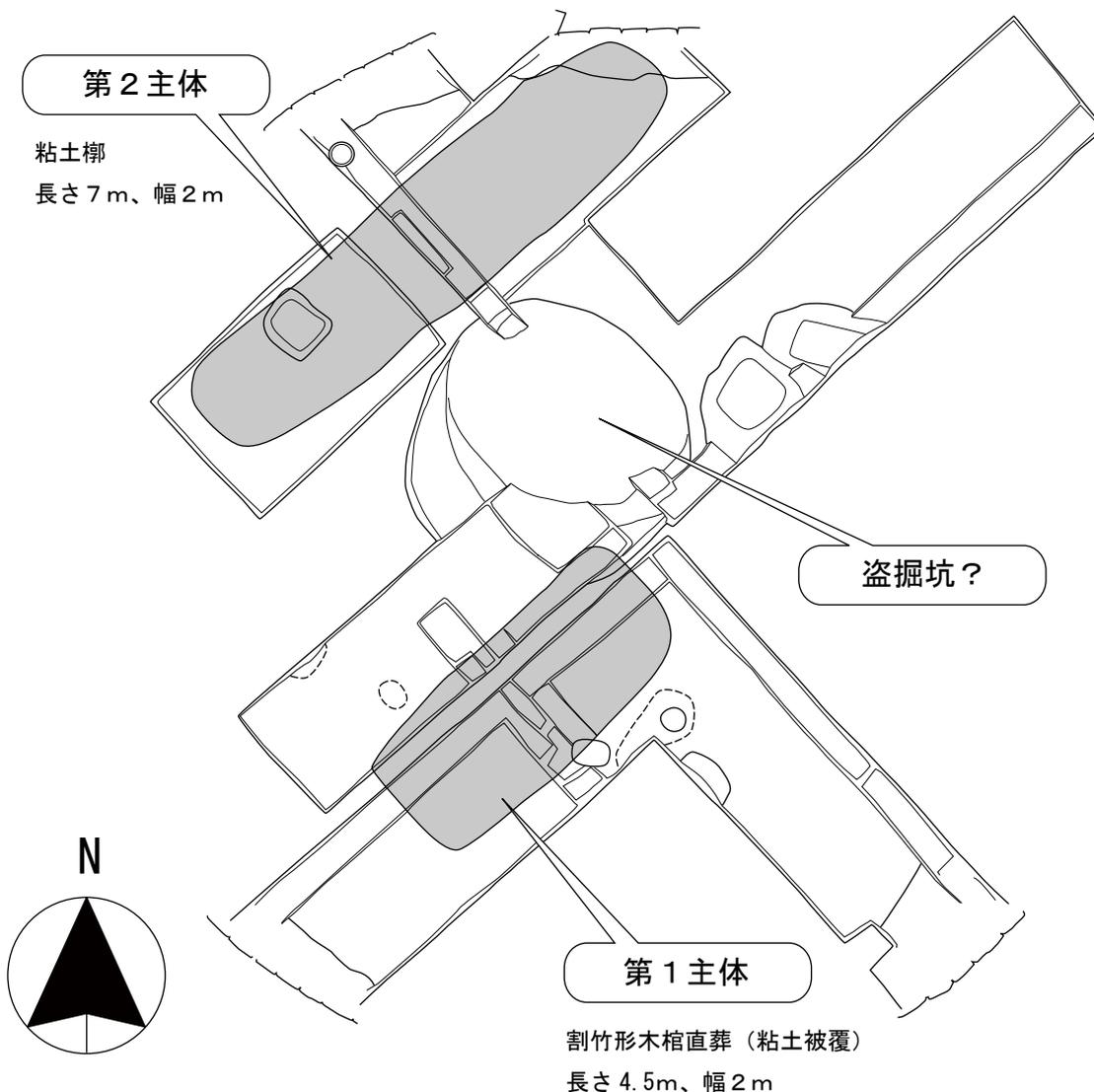
1) 墳頂部

後円部の墳頂部には、近代のものとみられる円形の石積みがありました。そのため、墳頂部の残り具合や埴輪の配置状況、埋葬施設の状況などを追求するために設定しました。

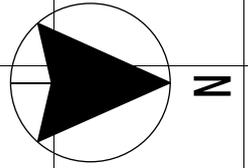
調査では中央部に巨大な攪乱坑、2基の埋葬施設を検出しています。中央の攪乱坑は直径約3.5m、深さ3.5m以上の巨大なもので盗掘坑とみられます。

2基の埋葬施設はどちらも古墳の主軸に平行しているものの、中心部からずれた位置から見つかっています。第1主体は長さ4.5m、幅2mの規模で、割竹形木棺に粘土をかぶせただけの簡単な構造です。第2主体は長さ7m、幅2mほどを測り、割竹形木棺の周りを粘土で覆う「粘土槨」です。どちらも位置や、100mを超える古墳の埋葬施設としては非常に貧弱なことから、副次的な埋葬と考えられます。

なお、調査では中心部に埋葬施設を発見することはできませんでした。しかし、中心埋葬があれば、盗掘坑の周囲やトレンチ内に何らかの構造がかかっているはずであり、もともと無かった可能性が高いようです。また、墳頂部の上面は盗掘や石積みに伴う造成で削られているようで、埴輪列などは見つかりませんでした。



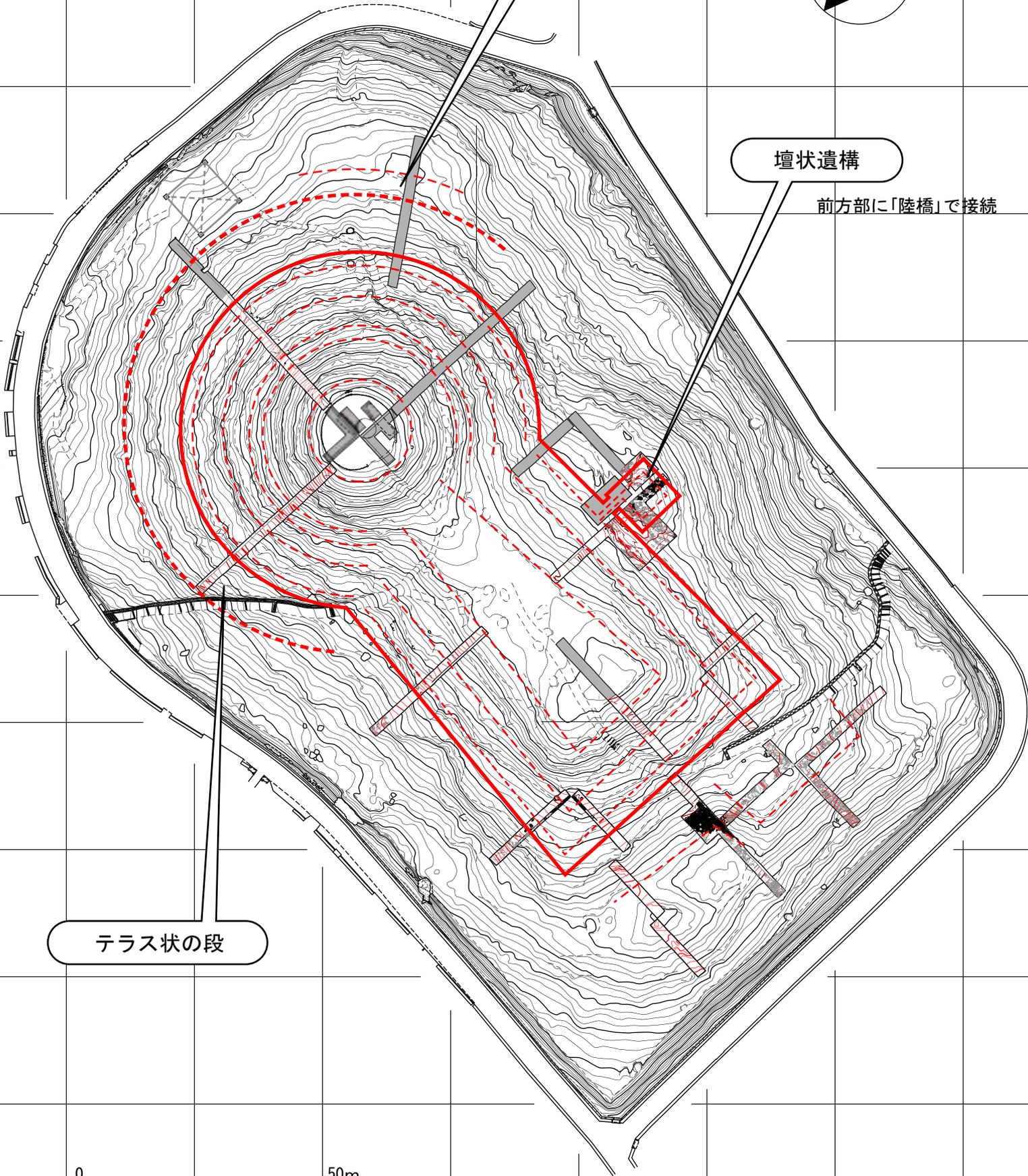
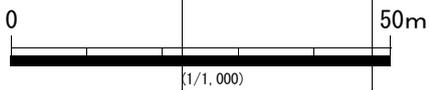
尾根筋を溝状に掘削



壇状遺構

前方部に「陸橋」で接続

テラス状の段



2) 墳丘の調査

今年度は後円部の周辺や北側くびれ部、壇状遺構周辺を中心に調査しています。

後円部では、周囲に幅 10 m ほどのテラス状の段を巡らせていることが分かりました。段は盛土や地山削りだしで造られており、下端は標高 94 m とほぼそろっています。この段は前方部でははっきりしませんが、前方部前端的の葺石の下端も同じく標高 94 m ほどであることから古墳周囲の整地・造成に伴うものようです。この段まで含めると墳長 135 m、前方部の葺石まで含め 150 m と金蔵山古墳や神宮寺山古墳に匹敵する規模となります。

北側の壇状遺構では、この壇が前方部に「陸橋」でつながっていることが判明しました。これまで壇状遺構がまさしく壇であるのか、単に掘り残された自然地形であるのか判然としませんでした。奈良県や大阪府の大型古墳にみられる「島状遺構」とみてよいと考えられます。

3) 出土遺物とその特徴

これまでの墳丘の調査で埴輪片は出土量が少なく、後円部や前方部の頂上など限られた場所に埴輪が並べられていたと予測していました。墳頂部の調査では、残念ながら埴輪が並んでいる様子などは残っていませんでした。しかし、後円部中央の盗掘坑からは多量の埴輪が出土しており、これまで分からなかった形象埴輪の破片も含まれています。墳頂部には形象埴輪を含む埴輪列がもともとあったことは確実なようです。

後円部から出土している形象埴輪には今のところ、家形埴輪とよろいの一部があります。家形埴輪は入母屋式の建物を象ったもので、屋根の上半には網代の表現があり、棟の上には勝魚木が乗っています。よろいの一部は「草摺」と呼ばれるスカート状の部分で、鉄板をつなぎ止めた表現である綾杉紋が巡らされています。上に短甲がつながるか、草摺だけを表現したものかは分かりません。

埴輪以外では、くびれ部周辺から須恵器片が出土しています。比較的古い特徴を持つ須恵器で、朝鮮半島の可能性もありますが、いずれも器形などは不明であり、古墳に伴うものか慎重に検討する必要があります。

まとめ

○埋葬主体の配置とその意味

墳頂部では 2 基の埋葬施設を検出しましたが、中心埋葬は無い可能性が高いことが分かりました。墳丘に葺石がない、埴輪が少ないなどこれまでも指摘されている未完成的な状況は、こうした中心埋葬が存在しないことと関係するのかも知れません。古墳に葬られる人物、またその周囲に葬られる人物は古墳築造の当初より決まっていたはずで、この古墳は何らかの事情で古墳の主が埋葬されなかった可能性があるのです。

このことはいくつかの問題をはらんでいます。第 1 に、古墳時代の研究では埋葬祭祀は「王権」の継承儀礼でもあったと考えられています。では古墳に埋葬されない、埋葬できない事情とはどういったものだったのでしょうか。第 2 に、古墳の築造・整備と埋葬祭祀の関係です。古墳は生前どこまで準備しておき、埋葬に伴い、あるいは埋葬後何を整備するものなのでしょうか。こうした調査事例はほとんど無く、この古墳の状況が普遍的なものかどうか、また、存在しないことを証明することは非常に難しいのですが、古墳や古墳時代研究に非常に重要な問題といえます。

○墳丘周辺の状況

後円部周辺のテラス、前方部北側の壇状遺構など古墳周囲の状況がかなり判明しました。陸橋を伴う壇状遺構は吉備では初めての確認であり、畿内の大型古墳との関係やそこで行われた祭祀など課題も大きなものといえるでしょう。